

中世後期・近世におけるヨークシャーの毛織物工業と都市＝農村関係
—特権都市ヨークと農村都市リーズの事例より—

05H1025 小山内孝夫

本論文では、中世後期・近世のイギリスにおける都市＝農村関係を、当時主要な産業であった毛織物工業を軸に取り上げた。この時代の都市および都市工業に関しては、G・アンウィンやH・ピレンヌ、および彼らの主張を消化した大塚久雄らの影響下に、煩雑な規制に取り囲まれ、農村工業の成長に伴ってやがて圧倒されるべき存在とみる見方が長らく支配的であった。しかし、ギルドなどの規制が足かせとなって中世都市が衰退し、他方で規制から自由な農村都市が勃興し近代都市へつながっていくとする単純な「中世都市衰退・農村都市興隆論」は、近年大幅に見直されている。そうした中でイギリス都市史家の坂巻清は、近世における都市の成長には農村工業と結びつくこと、すなわち「都市と農村との結合」が必要であったと主張するにいたっているのである。本論文では坂巻のこうした理解に依拠しつつ、とくにイングランド北部のヨークシャーを対象地域として、中世後期に繁栄を極めた大都市ヨークの中世末期および近世における衰退について、その原因を毛織物工業の衰退にみて、この毛織物工業の衰退は「農村との結合」に失敗したことによるものととらえた。またその際、同時期に著しく存在感を増した都市リーズを「農村との結合」の成功例として、ヨークと対照させつつ検討した。それにより、近世の都市の発展において農村が果たした重要な役割を、「農村との結合」の成功例と失敗例とをそれぞれ分析し比較した上で、従来評価されることが少なかった近世イギリスにおける都市のあり方を浮き彫りにすることが、本論文における主要な目的であった。

第1の研究対象である都市ヨークは、かつてはイングランドを代表する大都市であった。しかし、中世後期・近世のイギリス都市の経済状況を問う1970・80年代の「中世都市衰退論争」などを通じて、ヨークの人口や経済は中世後期から近世にかけて大きく変動し、同市がこの間に衰退を経験した可能性が高いことが明らかにされている。J・N・バートレット、D・M・パリサー、酒田利夫、C・ギャリーらの一連の研究から概観すると、それぞれ多少の相違はあるものの、いずれも14世紀後半から15世紀前半にかけて繁栄し、15世紀後半（とくに第4四半期）から16世紀前半にかけて衰退を経験し、ついで16世紀後半（とくに第4四半期）以降には控えめな復興をとげ、それが17世紀に入っても継続するという理解がおおむね共有されている。ここで問題とするのは15世紀後半から16世紀前半にかけての衰退期であり、その原因に関してはバートレットやパリサーが、それまでにヨーク経済を支えていた国際貿易と毛織物工業という二大部門が衰退したことによるものであったとする見方を打ち出している。ただ、この両部門はそれぞれ異なる道を辿っており、国際貿易は衰退を経験しつつもやがて活況を取り戻してヨークの復興に大きく寄与する一方、毛織物工業は中世末期の衰退から立ち直ることなく、16世紀後半からのヨークの復興にも

寄与していない。こうしたヨークにおける毛織物工業の壊滅的衰退は当時の代表的な大都市と比較しても際立っており、同市の毛織物工業の衰退には何らかの特殊な要因があったと推測される。そこで筆者が重視したのが、先に挙げた坂巻の「農村との結合」という要因である。坂巻は、農村工業が台頭した 15 世紀以降も、毛織物工業によって繁栄をつかむことに成功した都市の特徴として以下の 2 点を挙げている。第 1 に農村工業が興っている牧畜・酪農地帯を後背地とし、問屋制度を繰り広げるか貿易港として農村の毛織物を輸出していること。第 2 に、ギルドの親方層分解やギルド合同が進行して問屋制資本家や商人の寡頭支配が確立し、仕上げ業や原料・製品の流通の中心となり、紡糸・織布業を中心に担当する未熟な農村工業と分業関係を成立させていることである。ここでは、ヨークの毛織物工業の衰退の根源的原因をこうした「農村との結合」に失敗したことによるものとしてとらえ、その諸相を具体的に検討した。

まずヨークシャーには、ウェスト・ライディングというイギリス屈指の農村工業地帯が存在し、15 世紀以降飛躍的に発展した同地域の農村工業はヨークの都市工業の深刻なライヴァルとなる一方、もしこれをヨークが掌握できていれば、近世にいたってもヨークは重要な工業都市たりえたかもしれない。しかしヨークは、ウェスト・ライディングと密接な関係を取り結んでいなかった可能性が高いと想定される。すなわち、テューダー時代前半におけるヨークへの移入民の出身地を分析したパリサーによれば、ヨークへのウェスト・ライディングからの移入民は、同地域内部に形成されていたリーズ、ハリファックスなどの農村都市に吸収されていたため極めて少なかったとされている。しかも、ひとたびウェスト・ライディング内部にヨークと同様の機能を果たす農村都市が誕生すると、今度は距離が両者の結合を妨げる要因になったと想定される。矢口孝次郎が強調したように、当時の毛織物製造は運搬のための頻繁な移動を要したため、ウェスト・ライディングの紡糸工や織布工にとってやや離れたヨークの仕上げ業者や商人と結合するメリットは小さく、劣悪であったと想定される当時の交通条件もこの傾向を強めたと考えられるのである。

ヨークと農村との結合を論じるに際して、もう 1 つの重要な要素はヨーク周辺部の農村地域である。坂巻によれば、「農村との結合」に失敗し衰退した中世都市は、農村毛織物工業が弱体か、もしくはほとんど興らなかったようなミドランズを中心とした平野地帯や混合農業地帯に多かったという。また農業史家の J・サースクは、イングランドを高地地域の牧畜・酪農農業地帯と低地地域の混合農業地帯に二分し、前者では農村工業が発生しやすいが、他方混合農業地帯では穀作や家畜への注意が求められ、かつ労働力を大量に需要する共同耕地制が行われていたために、農村工業の発生・維持には極めて不利であったと主張している。ヨークシャーの農業に関する諸研究をみると、ヨークが位置するヨーク河谷は混合農業地帯で、農村工業が根付くのが困難な土地柄であったようであり、当然ヨークと農村工業との結合も困難であったと推測される。また農村工業の繁栄にはルーズな社会的環境が重要であったと広く認められているのに対して、ヨーク河谷の社会構造は比較的にジッドなものであった可能性が指摘されている。同地域は農業面のみならず社会構造の

面でも農村工業の繁栄には適さない環境であったようであり、この点もヨーク周辺の農村における農村工業地帯の形成に不利に作用したと考えられるのである。

他方、ウェスト・ライディングにおいては、リーズ、ウェイクフィールド、ハリファックスといった新興の農村都市が、周辺の農村工業と分業関係を築きつつ毛織物工業に依拠した繁栄を享受していた。本論文で研究対象としたのはウェスト・ライディング東部に位置するリーズであるが、それはなによりも同市が仕上げ・染色業や流通業を通じて農村工業と結合することにより、他都市を凌いでヨークシャー随一の毛織物工業中心地に発展したからである。なおウェスト・ライディング西部の工業地帯の只中に位置するハリファックスを差し置いて、リーズに流通・仕上げ業中心地の地位をもたらしたのは、州東部の穀作地帯および輸出港と州西部の毛織物工業地域の間中に位置し、両地域を結ぶ河川に面していたという同市の立地条件であった。ヨークとは反対に、リーズの場合はその立地条件が「農村との結合」の成功を大きく後押ししていたのである。

リーズを研究対象としたもう1つの理由は、17世紀の同市では毛織物工業を巡って、1626年の自治都市化や、市自治団体や富裕な毛織物生産者の主導による、農村地域を巻き込んだ形での1650・60年代における生産者の法人組織の創設といった事態が展開されているためである。この17世紀のコーポレーション、カンパニーは一種のギルドの復活であり、これに関しては大塚や常行敏夫が絶対王政と市の指導層が結託した独占政策・農村工業抑圧とする一方、武居良明はこの政治的展開の意義をそれほど重視せず、また坂巻が富裕な問屋制織元が自らの蓄積基盤として小織元を掌握しようとする試みであったとしているように、先学の間で小さくない理解の相違がみられる。ただここでは、これらコーポレーションやカンパニー創設の理由の1つに挙げられる品質問題の是正という点に注目した。従来関心が低かったものの、近世イギリス毛織物工業の抱えていた品質問題は、ネーデルラント史家の佐藤弘幸が明らかにしているように16世紀後半から17世紀前半にかけての輸出不振の一因とみなされるほど深刻であり、それは部分的には農村工業として発展したイギリス毛織物工業に、都市による品質管理が欠けていたことに起因するものであった。そしてこの品質問題の解決は、17世紀にノリッジ、コルチェスター、エクセターといった都市に創設されたカンパニーやコーポレーションによるところが大きく、都市はこれらのギルド的組織を通じて技術的に粗放な農村製品の品質管理を行い、不正品が市場に流れるのを防いでいたという。リーズのカンパニーやコーポレーションもこうした流れの中で生まれたものであり、その効果のほどは不明な部分が多いとはいえ、典型的な農村工業地帯とされるウェスト・ライディングにおいて、都市による品質管理が存在した可能性を提起することの意義は小さくないであろう。こうした品質面での寄与も、近世における「都市と農村との結合」の重要な一環ととらえるべきであるように思われるのである。